

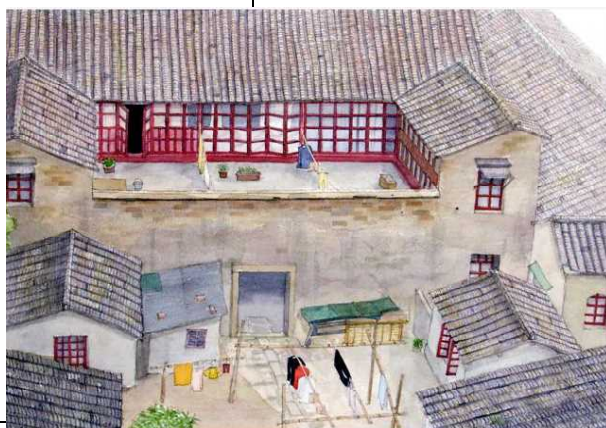
故郷第一場面 読んだ読んだ

三年一組

氏名

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、わたしは帰った。……（中略）……なじみ深い故郷をあとにして、わたしが今暮らしを立てている異郷の地へ引越さねばならない。

主人公は二十年ぶりに故郷へ帰ってきたけれど、自分の記憶とは違う、荒れ果てた故郷にむなしさと悲しさがこみ上げた。「昔はもつとずっと良かった」というところから、とても美しい故郷だったと想像できる。）でも、あまりに変わり果てた光景に「故郷は以前からずっと寂れていた」「寂れているように感じるのは自分の落ち込んだ気持ちこそがそうさせているのだろう」と思い込むことに主人公はしたのだ。長い間一族が住んでいた家を明け渡さなければいけない事実も、より主人公をそのように思わせたのだ。



くん

主人公は、冷たい風・鉛色の空・真冬の候などの情景を見たことで寂寥の感が胸にこみ上げた。昔はもつと良かったのに……と、これが「私」の故郷なのか……と物寂しい気持ちになった。その気持ちを作らないように、もともとこんな風だったと自分に言い聞かせ、楽になろうとした。寂寥の感がこみ上げたのは、故郷に別れを告げ、引越さなければならぬからだと「私」は思おうとしたのであった。

さん

主人公は、一時も忘れることのなかった自分の故郷へと帰郷する。しかし、その変わり果ててしまった自分の故郷に対して強い寂寥の感を感じた。片時も忘れなかったということは、主人公にとっては美しかった過去の村と今の村では落差が大きすぎたのであろう。挙げ句の果て、主人公は村は昔と変わらず、自分の考えが変わっただけであろうと、現実を否定してしまうのだった。

さん

主人公は懐かしの故郷に帰った。でも、その故郷は昔と違って、活気がなかった。主人公はその気持ちが寂しいものになったので、主人公は自分に故郷はこんな感じだと言い聞かせて、自分の気持ちを落ち着かせていったと思った。

くん

主人公は、苦しい生活の中で二十年ぶりの帰郷をした。帰郷の途中、天候が怪しくなり、自分の故郷が死にかけているのを見て、寂寥の感を感じた。昔と今のあまりの落差に絶望し、昔から今と変わらず死んでいくと思うことで自分を否定する代わりに寂寥の感を和らげた。そして、故郷に別れるという理由を言い訳とし、さらに寂寥の感をなかつたものとしている。

くん

主人公は二十年ぶりに故郷に帰ろうとすると、「怪しい空模様」「冷たい風」「鉛色の空」から、心情がどんどん暗くなっていった。また死んだかのように活気のない村々の様子を見て、あのころの元気に満ちあふれていた村々はもうないということを知り、寂寥の感がこみ上げてきた。この気持ちを収めるために主人公は、もともとこんなだったと昔の故郷での思い出を否定している。

くん